

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一冊一頁一頁發行）  
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別振興事業第三五二號  
昭和三十年九月二十五日印刷 昭和三十年十月一日發行

第二十一卷

第十號

# 淨土



十月號

# 言 頭 卷

宗教が政治にタッチする。これがよいことか悪いことかはとに角として、宗教の側に立つ者として、それは望ましいことには、ちがいない。

徳川家光の天海僧正を擔ぎ出すまでもないが、若し、本誌が印刷所の良心に於いて、順調に發刊されんとするなら、時期的に、ベロン大統領の失脚を、ここにとり上げて、さのみ遲きに失することはあるまいと思う。筆者のいわんとすることは、その失脚の眞因がカトリック政策の誤りにあつたということである。

嚴肅にして、最も保守的であると思われていたカトリシズムも、ベロン政權の元に於いては、自由を求めて、あえぎ苦しんでいたという事實が、今度の政變によつて、表面に現われたのである。而も、敢えて、それを標榜して立つた民衆の、心の底に流れるものが、カトリシズムであつたことに、私達は無關心ではあり得ないのである。

宗教が政治にかかわることは、宗教が、少くともその本來の使命を堅持する範圍に於いては、是非、なされなければならない。宗教人といえども、政治社會の一員であり、政治を通して、人類の最高の理想に邁進すべきだからである。そのためには、政治家も、まづ宗教人としての「信仰」を内に持つことの必要さはいうまでもない。と、同時に、宗教者も、この、きびしい對立の世界に生きる限り政治に無關心であることは許るされぬ。むしろ、これをリードすべきである。とはいえ、創價學會が近來、盛んに、政界に會員を送つてゐることは、これ亦、別の面から、戒心すべきであらう。(竹中)

## 目 次

柿の實 ..... 吉田絃二郎 (1)

宗教人ハイライト

俳諧寺一茶 ..... 折原教詮 (12)

讀書案内 ..... (10)

創 價 學 會 の 軍 隊 組 織 (新興宗教讀本二) ..... 竹中 信 常 (28)

佛教入門 (1) ..... 佐藤 密 雄 (4)

奇縁死刑房に話す... 山田 隆 元 (16)

虎御前 ..... 鶴田 湛 泉 (20)

會員だより ..... (9) (19)



## 柿の實

吉田絃二郎

竹藪の蔭にかなり大きな柿の木が一本ある。百匁柿くらいの柿である。不思議な柿で、澁柿とばかり考えていたが、枝によつては甘い柿もある。

あまり木が高いので女たちには取れないし、人を頼んで採るほどのこともないので、たいていは秋の鳥の啄くに委かせている。平常は竹藪のなかの柿の木は忘れともなく忘れがちである。

それでも柿の木はこの縁なき衆生をあわれむかのように、四季折々の變つた姿で、わたくしの心の扉を叩く。

五月雨のころになれば白い柿の花が音もなく黒い土の上に散つて来る。わたくしは、頭を上げる。そこには竹藪につゝまれて、かえり見られることもない一本の柿の木が、ぽつんと立っている。

わたくしはふたたび柿の木を忘れる。

麥秋のころとなり、武藏野に郭公が鳴きわたるところとなれば、小さいな柿の實が落ちて、地を

打つ。わたくしは忘れかけていた柿の木のことを思い出す。

秋の近づくにつれて柿の實は小手毬ほどの大きさになり、落ちて地を打つ音は、時としてわたくしを吃驚りさせる。

柿の實の地を打つ音もやがて間遠うになる。わたくしは柿の存在を忘れがちになる。

秋も深く、水霜が降りるところになれば鴉や鶉や目白が柿の實を啄きに來る。かれ等の鳴き聲はわたくしに、竹藪の小蔭の柿の木を思い出させる。

わたくしは竹藪のなかに行つて柿の木の下に佇む。絢爛たる柿紅葉につゝまれて花よりも紅い柿の實は、晩秋の日ざしを浴びて蒼空にかがやいている。

わたくしは柿の木を仰ぎながら考えることがある。

「人間は佛を忘れがちである。縁なき衆生である。しかし佛はいつも尊い機縁を恵んで、あわれな衆生に佛を思い出させるようにして下さる。」

昨日は裏の畑で、今年はじめてのコスモスの花が咲いているのを見付けた。初めて咲く花を見れば、遠い旅からでも歸つて來たわが子を見るような氣がする。

裏の畑でコスモスの花を見たので、庭に廻つて植え込みのなかに行つたら、山茶花が咲いているのを見付けた。

「いよいよ秋だな。」というよろこびとさびしさがそぞろに胸を打つ。

昨夜から台風の餘波か、前觸れであろうか、強い雨風がつゞいているが、氣になるので畑から庭を廻つて見たら、昨日初めて咲いたコスモスも山茶花も散つてしまつていた。

神佛の存在について議論を闘わしている間に、台風の前の花のような運命になつては困る。死

は一刻も待たないことを知りながらもわたくしたちは議論をする。議論もいいが、それよりも早く信仰が欲しい。

わたくしは昔、信州の沓掛で秋の芒の原を内村鑑三先生と歩きながら問うたことがある。

「先生は死後の世界の存在を信じられますか。」

これに對して先生は力強い語氣で、

「死後の世界の存在を信じます。」と答えられた。

「先生は最後の審判をお信じになりますか。」

「最後の審判を信じます。最後の審判がなければ、この世界で惡を働いた人間と善を働いた人間との差別がなくなるではありませんか。」

先生の言葉には微塵の疑いもなく、ためらいもなかつた。わたくしは豫言者ヨハネは内村先生のような人であつたろうと思つた。

信ずることを忘れては、宗教はない。悲しいかなわたくしたちは信じては疑い、疑つては信ずる。しかし疑うことが深くなればなるほど、そこから生まれて来る信仰はまた深くなつて来るであらう。

台風が近づいて來たらしく、雨を伴つた風がはげしく吹きつけて来る。あの恐ろしい風の音を聞けば故郷の父や母を想う。父は嵐が近づいて來ると雨戸を釘付けしたり、小屋に突つかい棒をしたりしていた。南方の故郷では年毎に家が壊され、屋根とともに人が流された。だから秋の嵐の脅威を感じる心のさびしさは、都會の人たちの想像も及ばぬところであつた。

父も母も今は嵐や大水の恐れもない墓の下に眠つてゐる。父も母も念佛を申しながら死んで行つたので、かならず淨土に迎えられるであらう。

# 佛教入門（その一）



## 四つの眞理

佐藤 密雄

### 一

今も昔も、現世の幸福を與える神々が多い。無病でありたいと思う心はすべての人に共通な悲願である。ことに不治の病に悩む人に待望されるものは萬一の幸せを與える神である。願う心が主觀的に眞實であればある程に願われる神は實在性を持ち、客觀性を増して來る。神は人間の欲望の反影で、すべての神は人間が作り出したものであるとさえ言う哲學者もいる。この様な言葉は、そのまゝ信すべきではないとしても、宗教以前の疑似宗教の神々は人間の欲望のこりかたまりの現れであることは事實である。「かくあ

りたい」と欲する心が、多くの人の共鳴を得るに従つて、「かくあるべき」ものとなり、それを可能にする神が考えられて來、いつしか考えられた神は實在している神に變る。又人間の作つた神であるから、人の求めに應じて神の性能も變るのである。辨才天は才能を辨することから、いっしか財産を辨する辨財天となり、ついには已成金を與え給うに至つてゐる。此様にして、人間の欲望に應じて神は作られ、神の靈能は變化させられて、印度其の他の古代の神々の歴史に見るようにやがて萬能神に完成させられ行くのである。

私共周邊に現に病氣をなおす神や、金もうけの神や更に

人を遊蕩に誘い入れる神までが榮えている。人を姪蕩墮落に導いて營利を得んと祈る人の願心に答え給う神があるとは全く奇怪であり恐れ入ることであるが、それが現代に存するのである。

先日日比谷公園で、原子力博覽會の會場建設のくわ入れ式が行われたが、此の時會場に「しめ」を張り、神職の「のり」とがあつて、「おはらい」をなしてから代表者の初くわ入れをなした。これは恐らくアナクロニズムの代表の如きものであると考えられる。現代の原子力關係者やこれに参加するジャーナリズムこそ、今日の時代の進みの先端を走る人達であると考えるが、此等の人も、日本開國前からの土俗神に頭が上らぬらしい。奇怪と言え、此程奇怪なことはあるまい。

其處で此の様な神を作り又はアナクロニズムをなす人間の心はなんに原因するのであろうか。佛教では、そんなことをなさしめるものを自我心と呼ぶのである。自我心の客觀化されたものが、現世信仰を受ける神である。そしてこの様な神々の母である自我心をば先ず第一に否定してかゝろうと言うのが佛教の無我の主張である。自我心は何事でも、その欲心を基として、それを満足させないものは、人事の法則であらうと天然の道理であらうと、此を左右しようとし、それをなす神を産出して、これに祈る。老病死を免れがたいと知る人間は、そのことを知るが故に尙更に眞

劍になつて、無病息災の司神を作り出し、狂熱してこれに祈るのである。然しこの姿は寔に、宗教とは似て非なるもので、宗教のない以前の本能的社會様相であつて、人間の自我心が妄想した神に我欲が祈りつゞける姿に外ならぬい。

佛教も老病死の人世苦からの解脱を願う宗教である。然し、老病死を感情的に無くしようとするのではない。老病死が如何なる事實かを見、それが何を意味するかと考えることから初まる。釋尊に依れば、老病死は一切のものが止まることなく變化すること、即ち諸行は無常なるものなることを示すもので、更に具體的に人間について言えば人生は生から老病を経て死えの過程を移行行くものであることを知らしめるものである。「老死は苦とせられるが苦なるものは無常なものである」と述べられているのは此の意味である。

老病死は人生に當然必然の事實であつて、川に於ける流れの如きものである。川の流れにさかろうものには流れは苦となり、流れに順うものには流れは感じないのである。水流そのものは苦でも樂でもない事實であるが、老病死も亦た、人生の水流の如きである。老死等を苦とする感情の内面は、老死等を好まず、此を不審とするものがあるから苦となり悲しみとなるのである。そしてこの老死を苦とする感情の積極な現われが、老死を避ける力ある神の産出で

あり、不老不死の祈りの行動である。

老死等を正視せず、好まぬまゝこれをなくせんと願う利己的欲心が、或いは除災の神となつて現われ、或いは老病死をなげき悲しむことゝなつて來るのであるが、この様な利己的欲心を自我とし、これを取り拂つて、冷靜に理論理性で事實を正視することを第一條件とする。佛教實踐道である八正道の初まりに正見が第一に上げられているのは、この爲である。

## 二

佛教に入る第一歩は無我心である。無我の我は靈魂であるから、佛教は無靈魂説であるとせられるのであるが、然し今日の靈魂の考えは複雑で、佛教の否定する我とは必ずしも一致しない。我とは上に述べた様に、自己の生存の一切を感情のまゝに、恣意に従わせたいと願ひ。その様に生活する心の根である。すでに述べたことから知られる様な人生苦とせられる老病死の苦が、苦とせられるに至る生活の心の根を言うのである。我欲とか我愛とか我慢とかに現われる根本である。

釋尊は「若し我があるならば、人間は老病死しない筈である。然し人は老病死するから我はなく、無我である」と述べられた。此は、意味深い言葉であつて、簡単に意味を盡し難いものなのであるが、此處で注意すべきは、「人は老

病死するから我がない」と言うことである。人間の心の底にあつて、どうしても老死等を認め難いとする感情の根本が我である。故に「若し我實在すれば老病死の方がない」筈であると言われるのである。我とは、自己の存在の仕方を自己の思うまゝにあらしめるものでなくてはならないものである。人生は無常であると言われるが、その様な理性の聲を認めずして、自己の欲するまゝに常住ならしめんとしているのが我である。すべてのことを、彼れ此れと好ましきものに會えば求め、好ましからざるものに會えばこれをなからしめる萬能の力、あたかも神の如き支配性のあるのが我である。釋尊は、「若し我があるならば、病等は無からしめんと思えばなからしめ、かくあれと望めばかくあり、かくある勿れと思えばかくあることなきを得るものである」とされた。我々の感情的自我を反省する時に、此の様な我はないとは言えないものがあるが、それを指しているのである。そして其が自己の欲望を満足さす爲めに、勝手な神を作り勝手な願ひをなすのである。正しい宗教とそうでないものとの相違は、この我を否定するか、これを肯定してその欲心に従うかにあるのである。

我々に當然な老病死等が苦となるのは、既に繰返した様に、これを當然必然のものとしなからであり、更にその奥底には、老病死の如きものは當然無かるべきものであるとする恣意的な私の欲求があるからである。釋尊は四つの

眞理の第一で「生も苦、老も苦、病も苦、死も苦なり。憎しみに會うも苦、愛するものと別れるも苦、求めて得ざるも苦、總じて言えば人生一切は苦」とせられ、その苦の原因は「渴愛」であると説かれた。渴愛とは上來繰返した我の欲のことである。生老病死とは、生から死への人生コースを、止まることなく進みつゞけることは當然のことなのであるが、それをそのようには見ずして、不當な苦とするのであるが、その原因が渴愛であると言うのである。人間の渴愛が老病死を苦としているのが所謂人生苦と言うものである。だから、老病死を苦とする我欲、即ち渴愛をなくすれば、老病死を苦とすること即ち生死の苦がなくなるのである。佛教ではこれを解脱と言うのである。即ち佛教では老病死の事實の方を我欲に従つて無くしようとするのではなく、我欲の方を否定して事實を事實として肯定して、苦とせずして生きようとするのである。言わば主觀の切換えをしようとするのである。此の切換えられる我欲の根が我である。生老病死のみならず、すべて欲すること欲するまゝにならぬ嘆きをするものが我の欲である。そして、此に支配されて、まゝならぬ世をかこつのが人間生存であるがこの我を否定し、それから自由になろうとするのが佛教の無我主義である。

現前の事實を如理作意するとか、眞如實相に生きるとか轉迷開悟するとかと、種々に表現される佛教の立場は一言

にして言えば、現在の生存の支配者である我の立場を捨てることである。客觀的な事實を自己の主觀的な恣意のまゝにあらしめようとする心を否定し、客觀的な事實をそのまゝほんとうに事實であると認め、我欲を轉じて、事實に隨順する生活に入ることである。釋尊は、無常を無常として隨順することが解脱であるとも述べられて居る。

### 三

佛教は釋尊の成道で成立した。成道とは人間瞿曇が轉迷開悟して佛となられたことを言うのである。瞿曇と呼ばれた釋尊の三十五歳の十二月八日のことであつたが、この日の、夜明の一刻に人間が佛と變つたのである。然し釋尊が人間から佛に轉じたのは肉體上の變化ではなかつた。背丈や體重が増したのでもなく、肉質が變化したのでもなかつた。だが成道した釋尊は、「不死の身を得た」、「雜食の身ではなくなつた」、「金剛の身を得た」と言われている。然るに、その不死金剛の身は、私共の目で見ると、不死でも金剛でもなく、八十年の生涯を老病死して過ぎ逝かれたのである。雜食の身とは、食事で養われる肉體を言うのであるが、その雜色の身でなくなつた釋尊は、沙門の法に従つて、一日一食を取つて身を養ひ、攝生良く四十五年の傳道を續けられた。そして晩年は純陀（ちゆんだ）の獻じた食物に折惡しく食あたりされ、それが釋尊の死の病いの原因

となつたのである。外形のすべては人間と變ることなく過ぎ逝かれた佛陀に、人間と變ることを求めるとすれば、肉體でなく精神の方でなくてはならぬことになるのである。

人間瞿曇が佛陀となつたのは、人間心の我が、無我の佛心に轉じたのである。無常の事實を否定せんとして然もその成らざるを人生苦として苦惱する人間心が、無常を當然として無常に生きる佛心に轉じたのである。即ち一切を自己の恣意に従わせようとする我がなくなり我欲である渴愛が失われたのである。釋尊も四つの眞理の第三で「人生苦の滅とは渴愛の滅である」と述べていられるが、成道はそのことの實現だつたのである。

無我の立場に立つた釋尊には、自己六尺の肉體を自我の身體として個執することがなかつたのである。自己の肉體をも含めて、草木山河一切を含んだ大宇宙を自身とする立場に入られたのである。自己六尺の身は勿論一切のものが止まることなく、例えば花散り葉出で、葉散つて新芽ふくらむに至らしむるは木の生命であると言えるが、あたかもその如く、萬物を生々せしめている世界の道理に自己の生命を見出されたのであり、このことが「不死の身」とか「金剛の身」とか「雜食の身でない」とかの自覺になつたのである。然し、六尺の身を超えても、六尺の身を粗末にしたのではない。花は自我心をすて、散り行くべきである

が、然し木の大生命の發現として充分に咲き終つてから散らねばならない。地上に現じた六尺の身は、大宇宙の生命力なる道現がその道理を具現したのである。この身のこの地に現われた意義目的を充分に果すべきものである。釋尊は、八十年の生涯の最後一刹那迄、佛教の傳導をなして止まなかつたのである。個身六尺を超えて、然も此を充分に生かすこと、此は釋尊が自身で示された佛教的生き方であつた。

釋尊の生きられた佛陀としての生涯の示す所から見ても佛教の根本の立場は、法界自然(ほうかいじねん)に生き、必然を必然として生きることである。釋尊が成道の後の初めの説法のことを初轉法輪と言うのであるが、この初轉法輪の説法は四つの眞理(四諦)と言われる教であつた。四つの眞理とは、第一が苦の眞理(苦諦)で、此は上述したことで「生も苦、老も苦、病も苦、死も苦なり乃至人生一切は苦なり」とするものである。第二は苦の原因の眞理(集諦)と言われるもので、これもすでに述べたことで「人生苦の原因は渴愛」とするもので、又第三は苦の眞理(滅諦)で、此は「人生苦の滅は渴愛の滅」であるとするものである。そして最後の第四は苦の滅に至る道の眞理(道諦)と言われるもので、此には正見・正思・正語・正業・正命・正進・正念・正定の、八正道が説かれる。

八正道とは一言に言えば、事實の眞相を見極めて、

其を道理とした生活である。即ち正見とは正しい見解で、正思は正しい考え、正語は正しき言語、正業は正しき行動であつて、此等を総合して正しき生活に入るのが正命である。そして、正命が持続し生活化する爲めに努力するのが正進で、常念不忘が正念で、心專注が正定である。従つてこの八正道は正見が生活そのものとなる様に仕組まれた實踐道であることが知られる。

八正道は佛教の修道の根本で、これについては別に論すべきであるが、こゝでは、人生苦を滅する爲の道が、正しいと言うことを基本にしていることを注意すべきである。

正しい意味は、他の言葉で言えば如實智見と言うことである。如實は事實を事實の如く知るを言うのである。然し、一應理論として知るだけではない。人間の我欲は根強いのであつて、理論として知つても容易に生活とならないのである。理論として知つたのは見道であつて、此の見道を得たものは、生活の一々に、見道を實修せねばならない。此は修道と言われるが、佛教の實踐は此の修道にある、人生の原因は我欲即ち渴愛と知るは易い。然し、佛教としてはそれは知る入口で、知るとは、そのことになることである。正見に化すると言う言葉があるとすれば、佛教での修道にもつともふさわしいと思われる。

(大正大學教授)

### 嗚呼七百五十年

淨土の祖法然上人逝きまして七  
百五十年の御遠忌せまる

興亡の史實のなかにゆるぎなく  
祖聖の教えいよかゞやく

秋の朝七百五十年御忌のポスタ  
ーをみ堂のなかにかけにけるか  
も

み堂ぬちあるかなきかの秋風に  
ポスターそよと揺れてゐにけり

宗紋はしるくかゞやき御遠忌七  
百五十年のポスター仰ぐ

たま／＼に村人來たりはからず  
も御忌の由來をわれは語るも

幾百年連絡檀徒の村人は心すな  
ほにうなづきにけり

祖廟いま本派に屬すとは思ほえ

ず念佛のところまこと遺跡

日本の津々浦々いや世界のはて  
までもこれを機縁につどりえ友  
は

御忌迎え殿堂の修理法要もさり  
ながらまづ心清くあれかし

これを機に祖聖淨土より還りま  
し世の人々を導きません

ふた／＼びも御忌に逢ひぬるよこ  
／＼びは老らくの身の生き申斐な  
れや

あすをしも知らぬ命をもちなが  
ら御忌おもほえばありがたきか  
も

× × ×

淺はかな御忌近くして思慕の閑  
歌たい執恩のしるしに……。

(静岡縣駿東郡富岡村 澤田岳潤)

|   |   |   |   |
|---|---|---|---|
| 内 | 案 | 書 | 讀 |
|---|---|---|---|

岡田 章 雄 著

## キリシタン・バテレン

日本 歴史 新書

至文堂B5版一九七頁



子供の頃讀んだ、立川文庫（豆本）の中に

キリシタン・バテレンの妖術と忍術との試合するところがあつた。幼い國粹者だつた私には白髪をのばして、妙な服を着た鷲鼻の妖術者より、チョンマゲで、巻物を横にくわえて目をつぶつて印を結んでいる忍術者が強いことを願う心が強かつた。キリシタン・バテレンという、こんな幼い日の回想が思わず浮んでくる。

學生の頃、長崎に遊んで、はるか昔のオラ

ンダ屋敷の跡をしのんで、異國風な教會の建物や、わづかに残つた石だたみの道をなつかしみもした。

日本人にとつて、キリシタンは、今日のキリスト教とはちがつている。今日のキリスト教には「夢」がない。それは余りにも、合理主義的な西洋文化の代表でしかない。そこへ行くと、キリシタンは、何といつても、歴史のとばりをすかしてみただけに、ロマンにのんだものである。

キリシタンというと、すぐ「迫害」「殉教」が聯想され、それは當然、ガラシャ夫人と天

草四郎とかいつた、悲しい物語にまで連續して行く。こんなところに、キリスト教とはちがつた、キリシタンということが考えられるのかも知れない。

正直にいつて、私は、キリシタンということに關しては、これぐらいのことしか考えられないし、またそれ以上、考えてみようともしなかつた。（尤も、日本の宗教の歴史を考へる場合には、そうではないが）

何だか、キリシタンとか、バテレンとかいうと、ロマンチックすぎて、すぐ色々な聯想のわき道に迷ひこんでしまつて、そのものを適確に掴みにくいように思へたのである。

## 二

此頃は、戰爭中の國粹主義の反動から、外國の文物をほとんど受け容れる傾向が強く、上はサルトルの實存主義から、下はマンボに至るまで、日本社會は外來文化の原色衣裳ですつかり面目を一新してしまつた。そこで宗教の世界でもひと頃は、キリスト教が、ものすごい勢いでのびたが、この所、下火になつて、逆に、新興宗教の簇生と、佛教復興のき

ざしとはさみ打ちに合っているようにみえる。

一つの文化（思想とか觀念とかを含めて）が、或る國に入つて、その國民の血肉に吸収されるには、色々の道すじがある。佛教が日本へ入つたのも、從來の、公式的佛教史では當時の勢力者蘇我氏の社會的・政治的權力に結びついたことによる、一つの作爲的道程であつたかに云われている。だが、文化は、物をやりとりするようには行かない。受け入れる側に、受け入れるだけの、色々の條件が揃てなければ駄目であり、佛教の場合でも、これを大きく受けとめた、當時の、一般民衆の信仰的素地が、大きな條件となつていたはずである。私達は、今後、歴史家がこう云つた、裏側の、民衆生活の中に入つて研究してもらふことを、待ち望んでいるのである。

キリシタンの場合でも、今まで、随分、色々の研究が試みられて來ているが、先に云つたように、キリシタン・バテレンという言葉が持つ、ロマンチックな、うるおいのある、當時の人々の生活感情のにじみ出ている方面への注目に缺けていたようである。

私は、岡田氏の此著を讀んで、私が佛教の歴史に望んでいたことが、キリシタンに於いて満たされた思いがした。キリシタンを受け入れる丈けの、當時の、日本の社會的條件が刻明に、興味深く描かれている。そして、キリシタンを、少くとも、その最初期に於いて歓迎したのが、ほかならず、當時の佛教の坊さんであつたことを知つて、びつくりした。こんなことにびつくりするのは、自分の歴史常識の貧困を告白するようなものだが。とに角、あれ程、異質的な宗教が、當時の日本にどうやら、浅い根をおろしたのも、デウスと大日如來とを一緒くたにして説いたという、素雜さが必要だつたわけである。

### 三

キリシタンが、日本の歴史の中では、非常に悲劇的な話材に富んでいるのは、邪宗門として、禁制され、迫害されたからであるが、このように、時の幕府をして、キリシタンを迫害させるに至つた。その素因というか、眞因というか、原因を作つたのも、ほかならぬ彼等バテレン自身だつたということを知つて

私は二度びつくりした。その裏には、カトリックとプロテスタントとの、私共佛教徒としては、想像も出来ないような、反目・争闘があつたからである。そのまた、奥には、當時のオランダやイスパニヤやイギリス等の間に植民地獲得の血みどろな策謀が秘んでいた。いつてみるならば、殉教した大勢の人々の血潮は、一體、誰のために、そして何のために流されたのか。それは決して、大神デウスのために、信仰のために、捧げられたとはいひきれないものがある。

それだからこそ、キリシタン宗門史には、切々たる、悲泣の響がきこえるのである。考えてみると、宗教というものが、一つの國から、他の國へと傳流する。また、或る時代から次の時代に繼承される。そして時にはさかえ、時には衰える。それ丈けの事柄の裏には言葉や形でいつくせない、そして、歴史の表面には現われて來ない、數々の物悲しくもまた美しい、人間の本性を吐露したような場面があることを、しみじみと感じさせてくれる好著が、この本である。

（竹中）

宗教人ハイライト



# 俳諧寺一茶

折原教詮

## 一

俳諧寺一茶はその数奇な運命と、特異な性格と、独自の俳風とを以て多くの人々に關心をもたれ、古來數々の愛好家、研究家によつて資料の探求、傳記の調査、作品の批評鑑賞等、多岐に亘つて研究紹介が行はれ行届いてゐる現状であるゆゑ、こゝには一茶の人となりて、日常の言動や考へ方を最もよく表現してゐる隨想録ともいはるべき、文化八年四十九歳の時に成れる『我春集』をはじめ、『株番』及び文政二年の元旦五十七歳にして筆を起こし、一年間の隨想

## 二

を綴り、最も人口に膾炙してゐる『おらが春』等に據りつゝ、本誌九月號に吉田絃二郎先生が觸れてをられますやうに、一茶の佛さまを詠める繁多の句の中、その一部について述べてみることにする。

一茶は通稱を彌太郎といふ寶曆十三年五月五日信州柏原の一農家に生れた。三歳にして母に死別した時から、彼の生涯を通しての悲しい運命が始まつたのである。

親のない子はどこでも知れる、爪を唾へて門に立つと、子供

らに唄はるゝも心細く、大かたの人交りもせずして、うらの  
畠に木萱など積みたる片蔭に跼りて、長の日をくらしぬ。我  
身ながらも哀なりけり。

我と來て遊べや親のない雀

六歳 彌太郎

と『おらが春』に、六歳頃の己を追懷してゐる句を載せてゐること  
は、あまりにも有名である。八歳の時第二の母が來、十歳の時弟專  
六が生れてから繼母の虐待を受け、童心に投じた強い暗影は、生涯  
消え去ることがなかつた。繼母子の不和を見かねた父は、彼を江戸  
へ上らしめたのである。一茶十四歳の時であつた。

二十五歳の頃には二六庵竹阿に師事して、葛飾派の俳諧を學び、  
師の歿するや二六庵を襲いで菊明と號してゐたのである。その後一  
旦郷里に歸り三十歳の頃、

春立つや彌太郎改め一茶坊

焉よ今日は彌太郎事一茶

等の句を残し、剃髪して俳諧寺入道一茶坊となつて行脚の旅に上つ  
たのである。長明・西行・兼好等の出家遁世に類ふべき俳諧道への  
出發であつた。その足跡は遠く關西近畿地方をはじめ、房總地方よ  
り更に奥州北陸地方にも及んだ。行く先きゝに同好と句座を開庭  
し、俳文を結び、芭蕉の如くその紀行に於て、自然への逍遙に於  
て、文を綴り句を吟じての漂泊生活が、文化十年五十一歳にして異  
母弟と和解し、故郷に定住するに到る迄續いたのである。その間、  
各地の門人俳友達と卷いた歌仙の數々をはじめ、多くの作品が諸書  
諸集に考究され網羅されてゐる。

一茶とは人生を一杯の茶と觀する意であつた。

### 三

十六日の晝頃、きせるの中塞りてければ、麥わらのやうに竹をけ  
づりてさし入置たりけるに、中につまりてふつにぬけず、竹の先  
わづかに爪のかゝる程なれば、すべきやうなく、欠残りたる奥齒  
にて、しかとくはへて引たりけるに、竹はぬけずして、齒はめり  
めりとぬけおちぬ、あはれあが佛とたのみたる齒なりけるに（中  
略）此寺は廿年あまり折ふしにやどりて、物事よそゝしくはあ  
らねど、それさへ心まゝならぬものから、かゝる憂目に逢ひぬ。  
まして四十餘年の草枕、狼ふす草をかたしきて、夜道たましひ消  
るおそれをしのび、あらし吹く舟をやどして、底の藻屑に身を浸  
す憂さをしのぎ、たまゝ花さく春にあへば、いさゝかうれひを  
忘るゝにたれど、ほとゝ露ちる秋の行末をかなしむ、重荷負  
ひて休ふごとく、樂のうちに苦しみ先立、其折々に歸のひたもの  
ちゞまり行くことを、今片われの齒を見るにつけつゝ思ひしられ  
ぬ。いつの日むしろ二枚も我家といひて、人に一飯ほどこさるゝ  
身となりなば、是則安養世界なるべし。

と『我春集』に誌されてゐる一文は、その隅々にまで、住むに家な  
き一茶が、言語に絶するさすらひの旅の苦難を嘗めながら、俳諧の  
道に打込んで歩んで來た、半生に亘る彼の相を、何の修飾もなくあ  
りのまゝに物語つてゐる。

なほ、この文は父の遺言によつて遺産を分配せられ、一家の主と

なるべき筈であつたが、繼母や異母弟がそれを實行しないので、冷くならみ合つたまゝ物別かれとなり、憤懣の情を抱いて再び江戸へ上つたその翌年の作であることに思いを致す時、彼の身にまつわる宿命的な悲哀が、一言半句の中にもひし／＼と感じられるのである。

『株番』巻の一に、特に親交の深かつた下總守谷西林寺の住職鶴老と二人して、六道について各一句づゝ吟じた作を載せてゐる。

(鶴老の句畧え)

#### 地獄

世の中は地獄の上の花見哉

一茶

是がまあ地獄の種か花に鳥

鶴老

#### 餓鬼

花散るや吞たき水は遠霞

一茶

#### 畜生

散花に佛とも法ともしらぬ哉

・

#### 修羅

穴一のあなかしましや花の陰

・

#### 人間

さく花の中にうごめく衆生哉

・

#### 天上

かすむ日やさぞ天人の御退屈

・

と吟じ、更に

#### 欣求淨土同行百人

我一にかせげよく花の春

一茶

の一句を加へてゐる。花に浮かれる人達を、憂き世にうごめく哀れ

なる衆生達よと詠じ、吞みたき水の焰となる目蓮尊者の母の故事を春の霞に譬へ、花にことよせて六道の教義を吟じてゐるこの六句は憂き世の嵐の眞只中に在つて、世の中の艱難辛苦を嘗め盡した一茶にして、はじめてかゝる達觀した境地を吟じ得るのである。最後に加へられてゐる「欣求淨土同行百人」の句題を持つ一句から、我執や妄念を捨て、すべてを阿彌陀さまにおまかせしてしまつて、ただ／＼同行の者と共に働けよく／＼といふ一茶の心を、はつきりと汲みとることが出來、こゝに彼の安心を見出すことが出来る。

佛典の教義を歌に詠じ、或は信仰を歌つた釋教歌は多々見受けられるが、俳句としては誠に珍しい。やはりこゝに他の俳人達と異なる一茶特自の俳風を感じられるのである。

#### 四

物別かれになつてゐた遺産相続問題も、幾多の曲折を経て後、明専寺の住職が仲裁に入り漸く和解することが出來、家屋敷を折半して異母弟と隣り合はせて住むことゝなつた。文化十年一茶五十一歳の時である。こゝで、彼は不安定な江戸の生活を引き拂ひ、故郷の地に住みつくことにしたのである。

見限りし故郷の櫻咲きにけり

笠蕭るや櫻咲く日を吉日と

等が、當時の彼の心境をよく現はしてゐる。

翌年四月妻を迎へ、七月一旦江戸に上つて知己故舊に別かれを告げ、江戸の俳壇生活を退いた。引退して新しい家庭を楽しみつゝも

彼は俳諧に日々を送り、折々江戸へ上つて俳交をも怠らなかつたのである。

## 五

文政二年の隨想を纏めた『おらが春』の巻頭に、元旦の句として目出度さもちう位也おらが春

こぞ五月生れたる娘に一人前の雜煮膳を据ゑて

這へ笑へ二ツになるぞけさからは

の名吟を残してゐる。やつと故郷に安住の地を得、妻を娶り、妻子と共に耳順に近い老の境涯となつて、はじめて一家團樂の楽しい元旦を迎へ、「目出度さもちう位」といふ、一女さとに「二つになるぞけさからは」と、その樂しさをありのまゝにぶちまけてゐるあたり、彼のあたゝかい人としての愛情を髣髴させるものがある。

同じく巻頭に、丹後國與謝郡宮内の普甲寺の深く淨土を願ふ上人が、世間では元旦に賑やかに祝ひ事をしてゐるから、自分もしようといふわけで、小僧を阿彌陀さまよりの年始の使僧に仕立て、「其世界は衆苦充滿に候間はやく吾國に来るべし。聖衆出むかひしてまち入候。」と阿彌陀さまの手紙を讀ませ、自らたくらんだこの手紙に、自らなげきつゝ初春の淨衣をしぼりて、したゝる涙を見て元旦を祝つたといふ話を載せてゐる。元旦を迎へて、一茶の頭には先づこの『沙石集』の説話が思い出されたのであらう。

『おらが春』の巻末に、

他力信心くくと、一向に他力にちからを入れて頼み込み候輩は、つひに他力繩に縛られて、自力地獄の炎の中へぼたんとおち入候、其次に、かゝるきたなき土凡夫をうつくしき黄金の膚になし

くだされと、阿彌陀佛におし誂へに誂ばなしにしておいて、はや五體は佛染み成りたるやうに惡るすましなるも、自力の張本人たるべく候。問ていはく、いか様に心得たらんには、御流儀に叶ひ侍りなん。答へていはく、別に小むづかしき子細は不存候、たゞ自力他力何のかのいふ芥もくたを、さらりとちくらが沖（玄海灘をいふ）へ流して、さて後生の一大事は、其身を如來の御前に投出して、地獄なりとも、極樂なりともあなた様の御はからひ次第あそばされくださりませと、御頼み申ばかり。如斯決定しての上には、なむあみだ佛といふ口の下より、慾の網をはるの野に、手長蜘蛛の行ひして、人の目を霞め、世渡る雁のかりそめにも、我田へ引く盜み心をゆめ／＼持べからず、しかる時は、あながち作り聲して念佛申に不及、ねがはずとも佛は寄り玉ふべし、是則、當流の安心とは申なり、穴かしこ。

ともかくもあなた任せのとしのくれ

五十七齡 一茶

文政二年十二月廿九日

の一文を記して、巻を閉じてゐる。年末に綴つたこの「當流の安心」なる文章の中に、一茶の宗教を窺ひ知ることが出来る。俳諧寺と自稱して、衆苦を一身に擔ひ、俳諧修行の漂泊の旅に出でてから半生やつと安住の地を得て家庭を營み「目出度さもちう位也」と落着いた境遇となりて、一年をかへりみての一茶のいつわらぬ心境である。「さて後生の一大事は……御頼み申ばかり也」と、一切を阿彌陀さまにおまかせしきつてゐる彼の心には、何の疑念の雲もなく、たゞ／＼阿彌陀さまの御手にすくわれてゐる人間一茶の赤裸々の相なのである。すべての妄執邪念を忘れ去つて、句作に精魂をかたむけ盡してゐる俳人一茶の、心境的に完成した相でもあるのである。

# 奇縁死刑房に話す

山田 隆 元

『死のアンバラワ抑留所』この本はこの度の戦争終了後二箇月過ぎた頃、爪哇島の和蘭人に讀まれた本である。戦時中爪哇軍抑留所は、爪哇の主要都市「バタビヤ」と「バンドン」と「スマラン」の三箇所に約八千人づつの和蘭人婦女子と老人男女とを收容していた。その「スマラン」地區の大部分を收容していたのが朝夕涼しい、アンバラワ高地に在る抑留所であつた。戦争の初期には給與も普通で、抑留者よりも不平を管理者へ申し出てこなかつたが、漸く戦闘苛烈となつて戦争末期の昭和二十年に入つてからは、軍は特に食料、醫藥に不足を生じ抑留者中よりの榮養失調や病人が増加し、病死者が毎日五人、六人と裏門より運び出され所内には暴動直前の險惡な空氣さえ醸される状況になり、加えて「バンドン」抑留所の收容者全部が「スマラン抑留所」のアンバラワ地區に運ばれ、爲めに現在でさえ辛うじて生活して居る抑留者が倍の數

となるに至つた。その他近邊の小都市に分散していた收容所も「アンバラワ」へ合流せよとの軍命あつて、遂にその合計一萬三千を數うる事になり、狹隘な住居と不十分な施設や給與は、發狂者や榮養失調死を多く出し、管理の職にある者達は長をはじめ日本軍人軍屬一同の困難且つ苦辛の毎日を送らねばならぬ日が續き、「警戒と保護」の任務を帯びて居る抑留所の係員は、可能の限りを盡して奔走したが、食料は思うように集まらず、軍よりは送つて呉れず病人への施藥も充分に出來ず、私は長であり責任者として幾度か收容者の代表數名より懇願され悲願され、遂には所内に放火事件等も生じ、この儘推移すれば、抑留者の大半は餓死するであろうと憂慮し、抑留所係の中にも榮養失調者が生ずるようになったので、これ迄に再三上司に報告はして居たが、このまゝではいけないと考へ意を決して「バタビヤ」の軍司令部へ實情を報告して

少しなりとも給與の改善を上申した。

その時軍の經理部長や軍醫部長は口を揃えて「戦闘苛烈の今日何を云つとるか、日本は國內、國外を通じ、軍官民を問はず勝つ爲めに食うものも食わずに戦つてゐるのだ。この際俘虜や抑留者をかまつてはおれぬ、勝つ爲めには俘虜や抑留者の死んで行くのも止むを得ぬ」との返辭である。苦戰中故止むを得ぬ事とは云へこれを聞いては何をか云はんや、然し敵國人とは云え非戦闘員である。戦の故とは云へ氣の毒でならなかつた。

地方住民の「インドネシヤ人」に話しても和蘭三百年の「ネシヤ人」に對する壓政の反動として何一つ協力してくれず、生きんが爲めには所内の鼠も犬も一カタツムリ」も老人子供が先を爭つて獲えろと云ふ慘狀で、終戦を聞かされた時は、これで責任が終つたなとほつとしたものだ。然しこの間「アンバラワ」抑留所から六百名の榮養失調死を出した。

「死のアンバラワ」これは「スマラン」抑留所の一部だが、その大部分の收容者一萬三千名の抑留者を收容している「アンバラワ」分遣所の長であり責任者であつた私は、終戦直後戦犯容疑者として抑留所係二十五名と共に最初バタビヤ市内グロドグ刑務所に投獄され、それから毎日は地獄の如き生活が續

けられ、更に移されてバタビヤの郊外チビナン刑務所に移されてからは給與は悪く重労働の毎日であつた。その内取調べがすゝみ、昭和二十二年二月刑務所内の取調べ室に於いて、戦時中日本軍の俘虜となつていた蘭軍大尉によつて、峻烈な取調べを七日間受けた。勿論六百名の榮養失調死の責任は當然とらされた。そして「山田は和蘭人婦女子と老人の死に對しその數が多い事を望んでおつた」と云う取調文書に承認のサイン（署名）をせよと最後に私に迫つて來た。私は強く反對し、むしろ如何にしてこの人達の生命を持続せしめようかと軍司令部へ願ひ、或は地方住民へ協力を頼み、或は所内にて農作物や家畜飼育數の増大を計る等可能の限り、上司や部下と研究實現して、收容者の代表とも謀り努力したのだと答へたが、それはその職にあるものとして當然な事を爲したに過ぎぬと云つて冷然たるものであつた。若しかゝる努力を日本軍がしなかつたら終戦時には大半が死んでいたのであらうと私は附言したが、更に感謝の念は無く、むしろ憎惡の眼で私をにらみ、當然の事に「サイン」せぬと云う理由で、遂に死刑囚房へ私は投げ込まれた。

「死のアンバラワ」といふ本は「アンバラワ」の抑留所に收容されて居た和蘭人中の婦

人記者の手記であつて、日本軍の物資窮乏時に於ける「アンバラワ」抑留者の窮狀を誇大して書いたものである事が取調べの時に判つたので、その婦人なら私も知つてゐるから對決さしてくれと云つたが許されず、本人も出て來なかつた。會へば私は、彼女をして感謝の言葉を云わしめる自信はあつた。事實終戦後、俘虜收容所より出て來た夫と共に私の前に來て日本軍に抑留されて居つた爲めに戦時中生命と財産を「ネシヤ」の暴民に掠奪されずにすんだと感謝した者も數人あつた。

#### 「チビナン」刑務所の死刑房

は平屋コンクリ建築の長屋式のもので前に中庭があつて、死刑囚が僅かの散歩時間に作つた小花園があり、室は一人つつ四疊敷のコンクリ床で裏壁は高窓一つ表は鐵格子を一つへだてて室の外に又四疊敷位の砂利場がこれ又鐵格子にかこまれ日光浴や水浴の時に用ひる運動場となつてゐるものが、一人毎に仕切られ、室が一行に並び前面の鐵格子の入口に重い錠があり、この錠は食事の時間約二十分と



陸元西

一人一日一回約三十分間の散歩の時だけはずされる。この死刑房に入れられた時、既に入房してゐる友は四十名あつて私は房列の中央の室に入れられた。今までは死の判決を受けて減刑された人は一人もいないし、勿も一週間に一人、二人と銃殺刑場のある前記「グロッド」刑務所へ連れ出されて行くと聞かされた。先きに裁判を受けた憲兵隊と拘禁所、俘虜收容所、軍法會議關係の人が多く入つてい

た。さぞかし皆は沈鬱な顔をしてるだろうと思つていたが案に相違して朗かだ。勿も元氣一杯各人の狭い室内にて體操もやれば歌も唄う、時に生死の問題に就いて隣室の者と議論もする。或は自作の俳句や和歌の發表等、そして夕食後に迫り来る日暮時の感傷を憶さうと、毎夕各人前の鐵格子に立つて皆に聞えるように外に向つて詩吟や軍歌、都々逸、流行歌等を室の順にはじめる。その一人毎に皆が拍手を送る。それが終ると日はとつぷり暮れて、孤獨と郷愁、そして死に對する考へ等に耽る事と思つた。室内に燈火は許されず看手の爲めの電燈が房列の外の電柱に數ヶ所あるのみ。私はかゝる夕暮時の死刑房の演藝會に歌を唄はず挨拶をした後は死刑の判決を受けて入つたのでは無いが雖ては此處へ来る身だと覺悟はしているので、歌の代りに、「死に對する覺悟と、私の信念を」、極めて簡単に話した、その第一日は「やめろ」と、どなる人もいたようだ。然し私は話を續けた、毎夕の演藝時間に、私自身に聞かしている氣持で話した。この時話しつつ、私自身自分の信念について考えた。そして現在の私は變て来る身だが、此處に居る友は既に死刑と確定しているのだ。しかも順序不同で裁判順でないから次週の呼出しには誰が刑場へ出されるか判ら

ないのだ。そう思うと全部の友に早く單信直入、安心決定してもらい度く一人でも多くと念願しつつ話した。生老病死の四苦は誰でもあつて誰が自分一人は大丈夫だと思へるかとも話した。然し不本意乍ら死に就く事は國の爲とは云え悲しく辛い事だ。佛教には因縁論を説き、菩薩行を説くところ、で説明した。死する時と處と様想こそ違え、念佛申す人は淨土に往生するのであつて、法然上人は、「生けらば念佛の功つもり死なば淨土にまいりなん」と或は「先きだたばおくるゝ人を待ちやせんはなのうてなのなかばのこして」と教えられて、師の死を悲しむ弟子達を諭された。そして上人にも御流罪の難はあり、釋迦にも十難はあつた。因縁は必ずしも此の世ばかりでは計りきれず、前世、前々世その又前の世の因縁によるものであつて、此の世の因縁ばかりと考る所に怨仇と執着が生じて、憤怒の苦しみに入るのであるこの苦より脱するのには先づ念佛を聲高らかに申しなさいとも話した。

かく云う私は妻や子に先だたれた身だが、皆と同様死刑になつたら淨土で再會必至なりと信じている。法然上人の御言葉にも、「會者定離は世の常の習、今はじめたるにあらず、何ぞ深く歎かんや。宿緣空しからずば、同一蓮に座せん。甚だ近きにあり。今の別れは暫しの悲しみ、春の夜の夢の如し」と教えられ

ていると話し、私が朝夕房内にて南方特有のあかねさす空に心を鎮めて合掌し念佛唱えてる時、友も私の聲を聞いて念佛するようになり、散歩中の友は看手から特別にもらつた紙片に淨土宗の香偈、三寶、四奉請、略懺悔、開經偈等、順を追つて私から教はり、且質問をするようになった。朝夕勤める人が多くなつた時私は嬉しく思い且安心した。

死刑房に入れた事が死刑房の友に話す機會を與へられたものとして奇縁を歡んだ。

或る友は刑場への出發に際して鐵格子の間から中へ手をさしのべて私の手を固く握り、「では山田さんお先きへ往きます。幸いお話を聞いて私は安心して行けます。あとは宜敷く願います。御世話になりました。」と泣くまいと頑張つて居る私の眼より落つる涙の顔をじつと見つめて、につこり笑つて連れられて行つた。そのあと私は彼と彼の死を知るであらう御遺族を想ひつゝ涙し乍ら念佛した。

死刑房の生活は三十日間過ぎて再び呼び出されたが、私の固い心に敗けてか取調官は、前述の「サイン」を強要せず、數日して私は法廷に立たされたが同様な陳述をした。判決は死刑の一つ前の刑二十年と、これも戰爭中俘虜であつた關軍大佐によつて言渡された。

その後昭和二十五年一月和蘭關係の戰犯者七百名と共に現在の巢鴨プリズンに移管されて今日に至る。

(在巢鴨佛教同人會員)

## 會員だより

に載つています。)

「浄土」誌四月號書評欄にありますが、石井教道博士編「昭和新修法然上人全集」發刊の趣が記載されてありましたが、何時頃何所から發刊になりますか、又豫定價格がいくら位かわかりでありますたら何卒御返報下され度御願ひ申し上げます。

尙、私は浄土誌を購讀している者であります。

(秋田縣仙北郡横澤村紅輝園 倉)

田信一郎)

(編輯部より……A5判、裝幀背文字本金函入、千二百七十八頁。

定價二千八百圓。送料百圓。發行所は浄土宗務所。發行は大體十月初旬の見込。詳しくは宗報九月號

突然でございすが貴本部發行

「浄土」を當所收容者教化の教材に致し度く存じますので、甚だ恐縮ですが一部宛御寄贈に預り度く御願ひ申し上げます。高松刑務所宛御寄贈賜つておりますが少部數且地理的關係から右特に御高配願ひ致します。

(丸龜市丸龜拘置支所長 鈴木王)

拙稿「輪廻歌」(本誌四月號)を

一字もまちがひなく貴欄に御掲載下され感謝申し上げます。御註書の

「少し判りかねる」とのことは御尤もと存じます。作者の私にも實は確たる信念は無いからでありま

す。此の點、寧ろ讀者の皆さんに

お教えを仰ぎたくおもいます。な

お、「萬朝報でもこんな歌を募集

した、ことがある」との仰せは、

全く實際でございまして、實は、

その應募のために、私が作り始め

たのでありました。それで起稿が

明治三十六年だというわけなので

あります。あれは、たしか藤村操

が「巖頭の感」を書いて、華嚴の

瀧に身を投じて自殺したのでして

何とか私もこの逆説を抱いて助か

りたいたしたことが、こんな歌に

なつた次第であります。

(東京・天沼 鳴海要吉)

御姿を眼前に見るようであります

突然の願ひで失禮ですが、佛

のお慈悲におすがりしたくてたま

らない、この二十三才の私に、何

率、佛道入門の方法、貴會の御出

版物(法然上人全集など)お知らせ

せ下さることを切に願ひしま

す。また學生の佛教聯盟の所在を

お聞きます。紙上で御意見を受

けるだけで幸甚の至りです。

(熊本市健軍町五寮三棟三十一

藤川複二)

(編輯部より……佛教青年會は、

東京大學内に本部があります。ま

た信仰への導きは、本誌宗教入門

(佐藤賢順先生)や來月より掲載

の佛教入門(佐藤密雄先生)を味

讀して頂きたく、法然上人全集は

浄土宗七百五十年御忌記念事業の

一として、石井教道博士編輯のも

のが發刊されます。)

謹啓、初秋、山野の色どりは、

人間社會に勇氣と感謝の念を興え

てやまないように思われます。寸

時を私達の淨化向上の爲御精勵の

# 前 御 虎



## 泉 湛 田 鶴

建久四年三月、那須野の狩が終ると、武士を錬磨せんために、更に五月、頼朝は富士の裾野に於て關東の兵を悉く集めて大規模の狩を行つた。これは幕府の威容を示すに十分であり、名勝富士にくりひろげられた壯觀な催しであつた。

廿八日、その日は小雨降つて日中以後は晴れたが夜に入ると再び雨となつた。子の刻(夜の十二時)そほ降る雨の中を二つの松明の光が裾野の闇を破つて行つた。

人影が立ち止まつて、

「こちらを向き候へ時致、あかぬ顔を見んと思ふ」

松明を振り上げていふ。

「おゝ、これこそ最後の見参となり申さう。兄上を見るも今ばかり」

松明をかざし合つて、あかず互の顔を見守る若者がゐた。

曾我十郎と五郎の兄弟であつた。

「今はこれまで、急ぎ候へ」

先に進みかける五郎の袖を控へて、

「女も數多くゐることゝ思はれる。大刀振りにも心得て罪なき女を傷けぬよう。後日の取り沙汰も憚かるゝ」

と、十郎は注意した。

「心得て候」

と、うなづいて足早に急いだ。

丹三郎、鬼王丸の従者に、母への手紙、形見の品々を渡して歸ら

して、今は何の心にかゝることもなかつた二人は、かひがひしく支度して目指す工藤祐經の屋形はいづくにと心も急いだ。

頼朝の御座所を中心として、諸大名の屋形が廂をつらねて營まれいろ／＼の紋の幕が張りめぐされてゐた。

屋形の前では篝が焚かれ、赤い火の紛が散つてゐた。番装束の警固の武士の姿がくつきりと照し出されてゐる。屋形の前で、兄弟はきびしく咎められたが、いづれも無事に通ることが出来た。

狩も終つて明日は歸館するといふ。これまでもたへず祐經をつけ狙つてゐたが、狩場では討つ機會は終になかつた。仇討つは今夜のみ、今夜を逸しては、又いつの日あるを、さう思ふと兄弟の心は、無やみに躍りいらだつのだつた。

折柄、謳聲が聞えて、

「波にゆらるゝ沖の舟、知る邊の山は此方ぞ」

と、扇で彼方を指し示しつゝ去り行く武者があつた。兄弟の志ほどを薄々知つてゐた本田の次郎親經の武士の情であつた。

「おゝ、天のお告げ」

と、去り行く武士の姿を、兄弟はしばし伏し拜んだ。

今は何の躊躇すべき、十郎は箱根山の別當行實から仇討の引出物として贈られた黒鞘巻の鞘を拂いて、五郎も行實から贈られた兵庫鎖の二尺八寸の薬物を引き抜いて、

「祐經の素首かいてくれようぞ」

と叫びつゝ、父の怨を晴さんと祐經の陣屋へ眞つしぐらに駆け

た。兄弟の殺氣は眞闇な富士を掩ふてゐた。

「おゝ、天祐か妻戸が開いてゐる」

武者ぶるいした二人の姿は、屋形の中へ躍り消えた。

安元二年十月、父河津三郎祐泰が、伊豆の狩場に於て祐經のため恨を呑んで倒れてから十八年目、つぶさに辛苦を重ねた兄弟は首尾よく本懐を遂げることが出来たのだつた。

この時、備前國住人、王藤内も、二人の刀にかゝつて果てた。

王藤内は、平家の家人瀬尾太郎兼保に與してゐたとの疑ひによつて囚はれ人となつて鎌倉に召し置かれてゐたが、祐經の取りなしによつて誤りである由謝してもらつて本領を返され歸國の途にあつた。どう思つたのか途中から引き歸して來た彼は、祐經の陣屋を訪れ、思ひ報ゆるためか、前夜燭名高い手越の少將、黄瀬川の龜鶴等を侍らして酒宴を開いて杯を重ね歡談して共に寢に就いたのであつた。

祐經は若い頃、小松重盛に仕へ、鼓の名手であり、當時としては岡本武士の中にあつて最も文化的な教養を積んでゐた。そのため頼朝に寵用せられ始終其の側を離れなかつたやうである。

一鷹の名の高い祐經は、前夜鼓を打つて楽しんだことであらう。

## 二

「助けて！」

と、悲鳴をあげて裾を亂した女の姿が、わら／＼と屋形の外へ飛び出して來た。

「仇討にございまする、祐成兄弟が工藤さま打ち果しましてございまする」

と、喉もさけるやうな聲でわめいた。

彼女等の必死の叫びも空しく暗闇へ消へてしまつた。續いて屋形を出た十郎は、

「伊豆の國の住人、伊東次郎祐親が孫、曾我十郎祐成、同じく五郎時致の兄弟の者共、君の屋形の前に於て、父の敵、工藤左衛門祐經を討ち取つたり、我と思はん方々は、討ち留めて高名にせよ」

と、大音聲があたりの静寂を破つた。

が、いづこも寂として十郎の獅子吼もいたずらに闇の山に<sup>コメヤ</sup>響を呼ぶばかりである。

いつもの假寝も、明日は歸館といふので連日のつかれに、今宵はぐつすりと寝こんだと見える。

尙も、小柴垣の下に寄つて聲を擧げて呼はつた。

兄弟が、くりかへし叫ぶ聲に初めて、

「スハッ」と異常な驚きと共に、屋形々々に人影がうごめいた。

「くせ者ぞ、お出合ひ候へ」

と叫び立てた。

「出合ヘッ」

と絶叫して眞つ先に平子野平馬允、多寡の知れた兄弟と、一刀兩斷になしてくれんと迫つて來た。

銀蛇が闇にカチリと結び合つた。

争氣全身にかけめぐる兄弟の劔は烈しかつた。敵もかねてさしもの平馬允、

「わあつ」

と聲をあげて逃げてしまつた。

つゞいて御家人の一團は、二人をめざして剎到して來た。

折から雷雨鼓をうつごとく烈しく、灯もない闇やみの中で白刃が斬り結んだ。

地上の闇さは、一尺失も覺東ない。

が、烈氣にみちた十郎の目には、くら闇の中にも爛々と光つて敵の姿がくつきり見えるらしかつた。

愛甲三郎、吉香小次郎、加藤太、海野小太郎、岡邊彌三郎、堀藤太、白杵八郎等は、十郎の險しい太刀先に次々に倒されて行つて惨たる血を一面に撒きちらした。

事態の只ならぬことがわかつて、數多い屋形々々は騒然となつて松明が諸方から駈け出して來た。おびたゞしい松明の光で、四方は一時に晝よりも明るくなつた。

兄弟は劔の林にとりかこまれた。二人が動くと思ふ多くの者が傷を負うけて倒れた。

尙も十郎五郎は烈劔を唸らせて、群り寄る敵へ激突して行つた。彼等の心膽を塞からしめたのか、「わあつ」と蟬が散るやうに逃げ出してしまつて、遠卷にして誰も太刀を向けて來るものがない。

この時、單身進み出た鎌倉幕下の豪の者と聞えある新田四郎は十郎と渡り合つてゐたが、彼のため十郎は討ち果されてしまつた。

最後まで闘つて斬死の覺悟の五郎は、獅子奮迅の勢で身を挺して切り廻つてゐたが、堀藤次と出合ひ、よい敵と一文字に飛んで切りかゝつた。藤次、五郎に叶はじと思つたのか逃げ出してしまつた。直ぐ目の前には、頼朝の本屋形の幔幕が張り廻されてゐた。

「堀藤次とあらうものが背を見せるとは卑怯ぞ、返せ返せ」

と、呼はりつ逃がさじと跡を追つた。背後まで追ひつめるとつと幕を引きあげて息を喘いでかけ込んだ。五郎もすかさず中へ入つた。

「無禮者め」

と、叱咤して頼朝は太刀を抜いて五郎へ斬り向はんとした。

「殿、殿自ら討つ程の敵に候はず。劔を納られよ」

と、傍にゐた左近將監能直は押し留めた。

この時、薄衣引被つて女装してゐた小舎人五郎丸、

「狼藉者」

と、矢庭に五郎の背後から羽がいせめに組みついて來た。

五郎は、振り放さうとしたが、がつちりと組まれて微塵も動かない。女と油斷したのがあやまりであつた。終に五郎丸のために搦め捕へられてしまつた。

時に、十郎廿二才、弟五郎は廿才であつた。

### 三

幕府が創設せられて鎌倉が繁昌し出すと、この邊の宿々には脂粉の色めきが濃く遊女たちが急にふへ名妓も現はれた。黄瀬川の龜鶴手越の少將、大磯の虎などいふ妓名は若い鎌倉武士の話題となり大きな魅力となつてゐた。わけでも虎は、大磯の虎御前と稱へられ嬌名鳴り響いてゐた。母は大磯の長者の娘で、一ヶ年ほど東に流された伏見大納言實基卿の落胤といふことであつた。

父の血流を受けてか志も高く品位があつて和歌の道にも心を寄せ諸藝にも達し、數多い無節操な遊女と異つて一つの矜持を持つてゐ

て、高雅のある才色をかねそなへたかくれなき名妓であつた。そんなわけで、幕下の諸豪も感勸を通じやうと欲するものも多かつたが、虎はあへて顧みなかつた。和田義盛さへ、彼女を酒席に侍らさうとして拒まれた挿話がある。

義盛が一門百五十余騎を率きつれて下野へ志した時のことである。

一門に向つて義盛は、

「都のほどは限りはないが、鄙では黄瀬川の龜鶴、手越の少將、大磯の虎といへば、海道一の遊君と聞へてゐる。虎を呼んで一献酌ふではござらぬか」

と誘いた。こんなことには誰も異論のはづがない。直ぐ賛成して虎のある長者の家へ使ひを立てゝかくと申し入れ大磯へ駒を進めた。

こゝの遊女の屋形は街になつて、尙擴がつて行かうとしてゐる。何しろ幕下にあつても侍所の別當として勢望のある義盛の入來のことゝて、長者は悦んで一行を慰勸に迎へた。

妍を争ふていづれ劣らぬ美妓數十人、色香もこぼれるやうな装をこらしてずらり顰然と酒席に待つた。一門居流れも杯を酌み交はし絢爛な酒宴が始まる。酒がまわつて今様がうたわれ、鼓にうかれ女達は笑ひさゝめいてゐた。

「遅い、遅い」と、つぶやく者がゐた。

どうしたのか、虎は未だ顔を見せなかつたのである。

義盛は、いぶかしく思つて早や不快の色を現はして、  
「この君たちに結構なれど、こゝに参つたは虎御前の顔を見参仕

らんためであつた。なぜ顔を見せぬ」

と詰つた。

長者は、心得顔に笑をふくんで愛想よく、

「このところ何となくいそがしくて」

と、取りつくろいながら、座敷を立ち出で虎の部屋に来て、

「何故、ぐずぐずしてゐられる。早く出ませ」

と、促して置いて座敷へ戻つて来て座り、

「只今、虎は参ります」

との答へに、

「和田どのに想はれるとは、日本一の果報者よ」

と歡聲をどつとあげた。

義盛は、相好をくずして杯をひかへ、今か今かと待つてゐた。

が、仲々姿を現はさなかつた。

余りに遅いので痺れをきらした義盛は、いたく氣色を損じたらし

かつた。長者はしきりに氣をもんでゐた。

「今日は、虎の心に背くことがあるならば改めて参るであらう」

甚だ自尊心をきづけられたのか、嫉妬まじりに胸の鬱憤を叩き

つけた言葉である。

長者は、はら／＼して大切なお客の氣嫌を損じてはと、再び座敷

を立つて、

「何とて出でられぬ。時世に従ふならひ、思はぬ人に馴るゝも遊

女のつとめ、怨しいず振舞ひ」

と、顔色をかへて虎を難詰した。

虎は、さきほどから酒席へ出ようか出まいかと、しきりと心をも

だへ惱んでゐる容子であつた。虎の胸中には、十郎の姿が去來してゐた。それもそのはず、二人は三年この方契り合つた仲であつた。

十郎の父、祐泰は容色美麗で性質温順であつたが、力は人にすぐれ武藝に達してゐた。この父の血をうけて十郎も容姿もよく日頃腕を磨いてゐて、優しい容貌のうちに潑刺とした若者であつた。知り染めたのは虎の十七才のときであつたが、公達のやうな十郎に、虎は深く思慕の糸をからませてゐた。いや二人は連理のやうに固く結ばれてゐた。虎は十郎のことを思ふと胸一杯になつて、どこにもやり場のない氣持で衣引つ被つて打ち臥してゐた。涙を押し込んでゐる容子である。

長者は虎の容子を眺めて、小憎く思つたのか邪慳さうに、

「あまりな振舞よ、容貌美を鼻にかけるものでない。なほも出にくいならば勝手にするがよい」

恨みがましくさん／＼に毒づいて鞭のような言葉を投げすてゝ出て行つた。

虎に冷淡にされて義盛の家臣は、血走つた醉眼に怒りをみせて、

「人を喰つたる遊女め」

と、斬りすてんといきまいた。

長者は恐れて尙も頻りに説いてみたが、十郎以外には心を動かしなことのない虎は、

「十郎さまは貧寒であります。それに比して和田どのには權勢ならぶものもない豪貴の方であります。どうして貧富を以て心を易へませうや」

と、毅然といひ放つて、斷じて出まいと朱唇をかねてゐた。

虎は鎌倉に呼び寄せられて兄弟の仇討の干系があつたか否やの尋問を受けたが、咎なきことがわかれると放免の身となつた。

祐成兄弟が首尾よく本懐を遂げることをどんなに願つてゐたかも知れなかつたが、さて十郎が新田に討ち果されたと聞くと、虎は悲泣してやまなつた生涯の生命とした十郎である。急に世の中のすべてものが光がなくなつた思ひして、大きな精神的な動揺を受けた。

十郎の三七日を迎へて箱根の坊に於て佛事が営まれると耳にした虎は、佛事をも聴聞しせめてものの一つの諷誦を捧げたいものと、互に最後の別れを惜しんだ時、十郎から片身に贈られた蘆毛の馬に貝鞍おいてはるゝ箱根に登つて行つた。深く心を定めた虎は、未だ髪は剃つてゐなかつたが黒衣袈裟姿となつてゐた。

箱根山は關東第一の靈山の上、五郎幼年の頃の修道の地でもあつた。

五郎が十三のとき、母は、

「父上はいたく箱根の權現を信じ給ふた。和子は今から箱根に登つて僧になり父上の冥福をすゝめるがよい。これが和子が父上につくす第一の孝養であります」

と、涙ながら説き聞かせて、箱王を別當行實の許に送つて、十七の時曾我へ下るまで佛道に勵んだ因縁深い山であつた。

虎は、佛事に和字諷誦文を捧げて蘆毛の馬を布施とした。

變つた虎の姿に行實は涙ぐんで、

「さかりの子を先立たせる親、若うして夫に後るゝ妻、世間に少

しはござらぬ。いつの世にも再び相見んことも叶はぬ別れ歎き給ふも無理もない。なれどすべては色卽是空の有様」

と、慰め教へた。

行實の許で髪を下して出家を遂げてしまつた虎は、十九の春を迎へたばかりであつた。墨染姿の虎は、妖美にさへ見へ、ひとしを美しく思はれた。

箱根を下つた虎の足は、いつしか十郎が討死を遂げた富士の裾野に向つてゐた。

日を重ねて虎は、人なき裾野にさまよひ歩いた。果てなき荒野を一人で歩む心細さが身にしみて来る。

井出の館の跡にたゞずむと、あたりは寂漠として何ともいへない淋しさにとらはれた。十郎や五郎の姿がまざゝと思ひ浮べられてじいんと胸が熱くなつて来る。

十郎が自分を呼ぶような氣がした。元より氣のせいだ。

「十郎さま」と思はず呼んでみた。その聲は空しくわが身にかへつて来るのみである。蟲の聲すら聞えない。たまらなく淋しくなつて来て、冷たく草の上に座つてじつとうなだれた。ほゝに涙がぬれて来る。

空には、夏に近い色をつゝへた色んな形の雲が、無心に浮んでゐた。

## 五

虎は淋しさに堪へかねて日頃姉のやうに慕つてゐた少將に逢つて見たく思つたのか、駿河國の手越の少將の屋形を訪れた。

屋形の女主人は、けげんな顔をして虎の顔や姿を目を見張つてまじりと眺めた。

「まあ、虎御前、どうしてそんな姿に」

「少將御前に會つてちと物語いたしたいことがありますからと申し下され」

女主人は驚きと共に、虎を一間に導いて少將に逢せた。

少將は、虎の變つた姿に驚きの余りいひ出すべき言葉もなく、只呆然としてゐたが、目には一杯涙をためてゐる。

「かの祐成どのと三年の間親しくしてゐたのも誠に宿縁の深いことと思はれ、今更余の男にまみへやうとは思ひませぬ。あの人失せ給ふた時には、妾も跡を追ひたいと思ひましたが、その心もつきかねて生きながらへて居ります。世を渡る遊女のならひ、まゝにならぬ勤めの習はせ、心に任せぬことも數々あると思はれ心を決して三七日の追善に箱根に登り髪を下して只一人さまよひいで、富士の裾野の邊にて祐成どの、跡なりとも訪ね憂き心も慰め、このあたりにあなたも居らるゝこと故お目にかゝつて物語もし、この姿を見せんものとこれまで参りました」

出家した次第を物語つた。

少將も虎の心を推し計つて、

「誠に、いか程お歎きのことと思ひやられます」

と、同情の涙をしぼつて、

「あの夜は、黄瀬川の龜鶴さまと祐經どのに招かれ屋形に待つて居りましたが、女童に命じて妻戸のカキガネをはずさせて置きました。いかにしても討たせ参らせやうと思ひましたことは、たゞひと

へに御身のためであります」

と、その時の事情を打ち明けた。

「まあ、そんなまで私共のことを、祐成どのもあなたの御好意をききましたならば、いかばかり嬉しく思はれたことでせう。あなたのお計ひがなかつたならば、どして本意を遂げ得たでせう。」

氣心も合ひ互に信じてゐた親しい友の厚情に、今更ながら感激して、虎は法衣の袖を顔に押しあてゝすすり泣いてゐた。

少將は虎の墨染の姿を眺めて、何かしら尊いものを見るやうな感に打たれて心を大きく動かされた。虎の今の身の上を羨ましくさへなつて來た。思へば、たまゝ尊い人身を受けて來ながらつくづく自分は罪深い身であると思はれてならなかつた。灯ともし頃となると心を往來の蕩見にかけて誰とも知らぬ人を待ち、酒興のたわむれとなつて、夜毎の愛慾の世界に耽溺する泥沼の中の生活ではないか。すりきれた操に、汚れた身體に、自分といふものにすら嫌惡が湧いて泣きたいぐらいである。魔の淵瀾に沈んだ身に、いつ浮ぶ時が來るか。浮ぶ時のないことを思ふと身がおのゝき、所詮生涯苦海をのがれることの出來ない哀れな自分を思ふと、己が薄命に泣けてくる。

己れに醒めた少將は、身の行き先が案じられて、

「出家して罪障のつぐなひをしたい」

せひ一諸に菩提の道をたどりたいと虎に乞ひた。

「後悔の種とはなりますまいか」

と、念を押した。

重ねて目を輝かして乞ふ決意の固い少將の切なる願ひに、いなむ

ことも出来なかつた。少將は髪を下してなまめかしい美服を墨染に更へた。

共に修道の道に勵まんものと手越の宿を立ち出で、互にいたわりながら馴れぬ行脚に苦勞を重ねて善光寺へ向つた。

## 六

信濃の善光寺へたどり着いた二人は、他念なく淨行にいそしんで。二年の歳月が早くも流れた。

虎は、別當行實から色即是空をさとされてあれほど感激を催したが、尙、何か物足らぬ満されぬものが近頃感じられて來た。こゝには、虎の深いなやみを解いてくれる僧がゐない。

その頃、法然上人の噂をきいた二人は、都へ上つて是非上人に逢つて念佛の法門を聴聞せねばと思つた。

直ぐ旅裝をととのへて、うちつれて京の吉水に上人を訪れた。

上人は、

「名號こそ、廣大な功德を含んで居ります。アミダの三字の中には、すべての行も、すべての佛菩薩も、すべての教も含まれてゐます。これを唱へると、三祇百劫の長き間の修行にもまさり、いつも佛に護られて、なやみある身もそのまゝに救はれます。それ故、淨らかなみ國に生れるためには、たゞ一すちに念佛を唱へられよ。念佛こそ、女人もたやすく得道し得る法門でございます」

念佛の一すちに生きる道をやさしく説き示された。

虎と少將は、念佛の教へをしかと胸にたくき込んで郷里に戻ると大磯のあたり高麗寺の山の奥に、さゝやかな柴の庵を結んだのだつた。谷の水の音、峯の嵐も菩提をすゝめる聲と聞へ、花の色、鳥の聲も佛の教を説くかに思はれた。ことは、絢爛たる遊興の席にもました澄明な天地であつた。流々轉相の世の中を外にした生活であつた。

起き伏しを共にし、虎が山嶺に登つて花を摘めば、少將は谷に下りて水を掬ひ、一人花を供へると、一人は香をくゆらして十郎兄弟の菩提を弔ふた。六時禮讀に六根を淨め、一心に菩提の道にいそしんでゐた。

念佛の日々は、かつて味つたことのない至樂を見出し、心のふくらむやうな大地に足をしつかりとつけたやうな生活であり、天地にとけて行くやうな生活であつた。

大悲に生きるものにとつては、退屈もなければ、孤獨の淋しさもなかつた。大きな自己を發見した喜びがあつた。

天地、宇宙と共に呼吸し、靜中のみち足りた宗教的滋味感に、光明のあふれた生命の充實に、この世に生を享けて如來の大悲に浴する身のほどに、限りない喜びを感じたのであつた。

今や虎の十郎に對する思慕の情熱は、無量廣大な大悲に生きる喜びに燃へてゐた。

山も樹々も、大悲に浴し、天地の中に春や秋を楽しむかのやうに思はれるのであつた。



# 創價學會の軍隊組織

——新興宗教讀本　その二——

竹　中　信　常

一

昭和二十九年十月の或朝、私は何気なく東京朝日新聞を聞いておどろきました。三面トップ記事として、その頃、ぼつぼつ噂にのぼつていた。創價學會のことが載せられていたからです。こんなに、大きく扱われる程だつたのかと今更自分の認識不足を反省してもみたわけです。

内容は、創價學會という團體が、日蓮正宗の信仰を弘めるために、集團的に、方々を押しまわつてゐるという記事で、宗教界の權威の方々の、これに對する意見も寄せられていました。全日佛の事務總長で眞理運動の主幹友松圓諦氏は「創價學會はファッショである」と、斷言していました。その後、私自身、この方面の研究をすすめて参りましたところ、友松氏の言葉通り、ファシズムのこりかたまり

みたいであることが判明して参りましたので、今回は、創價學會を直接的な材料として、更に、近來の新興宗教の傾向が、次第に、右に傾きつつあることを、具體的な組織の面からと、それが由つて以つて起つて來た教理的な面とについて、皆さんにお知らせすることに致します。

二

先づ組織の面からみて参りましょう。前回に申し上げたように、創價學會の本部は新宿區にあります。その本部の組織は次のように分れてゐます。會長の下に理事長及び理事若干名がいて、學會の運営の中樞をなしていますが、その實際の活動は、以下の各部によつてなされてゐます。

教學部、統監部、財務部、渉外部、指導部、文化部、企画部、青年部等であります。この中で、對外的に、最も活

躍しているし、また會の性格を最もよくあらわしているのが、青年部であります。青年部は男子部と女子部に分れておりますが、その組織は、參謀室、攻撃隊、偵察隊、輸送隊、軍樂隊等の職分から成り立つており、參謀室には、參謀室長と參謀とがいます。かつての陸軍省の廊下でも歩いているような氣がします。

名前ばかりでなく、その意氣ごみもすざまじいもので、青年部は會長直屬の親衛隊——かつてのドイツのヒットラー・ユーゲント、或はイタリーのムッソリーニのひきいる黒シャツ黨を以て任じています。それですから、青年部員たるものは、會長の直參旗本であり、會長の命令は「佛勅」——佛陀の命令——として、絶對無條件で服従し、そのためには「不惜身命」火の中水の中に飛び込んで行く覺悟を持たねばなりません。

事實、昭和二十九年十月三十一日には、一萬名の青年部員が富士登山をし、その中、四千名の女子部員は、白鉢巻に金剛杖をかいこんで、かけ聲勇ましく大行進をし、更に富士の裾野において、「大閱兵式」をくりひろげ、白馬「銀嶺號」にまたがった會長の馬前を、歩武堂々と「分列」行進をしたり、「突撃」をしたり、空には、チャーターした飛行機が爆音も物凄くとびまわつたという有様。全く、下手な自衛隊そこのけの盛觀を展開しました。

創價學會は、全國に十六の支部を持つており、その中、十支部は東京にあるとありますが、一支部を一部隊とし

て、獨立の戰闘單位を構成しています。このように、用語の上で軍隊であるばかりでなく、青年部員の意氣もまた、殉國の志士ばりで、仲々さかんなものです。そして、青年部の仕事の主なものは、對外的に、他宗派・異宗教のものに對して、個人的には改宗を強要し、彼等一流の、獨斷的な教義を以つて、滔々と辯じ、或は威かくして、正宗の信仰に引き入れ、寺院教會などには徒黨を組んで押しかけ、法論をいどむ。この場合に、その組織力がものをいうのです。

私のところへ、夜、三人程來たのは、今から思うと「偵察」に來たのでしよう。そして、相手にすべきだと判定すれば、直ちに大勢で出かける。これも實際にあつた話ですが、或るお寺へ、二人の若い者がやつて來て、「信仰について、色々とお話をききたい」というので、住職は何氣なく、「それは結構なことです。さあ、どおぞお上り」と答へた。すると、一人が素早く戸外に出て合圖をみると、門前に待機していた二三十人の者が、どやどやとやつて來て、座敷に上がり込んでしまつたのです。こうなつては、もう駄目です。こちらが何と言おうと、何と説明しようとしてんではうけつけません。自分等のいいたいことだけを、代る代るにべらべら喋り、二言目には「謗法だ」「邪教だ」の一天張りです。少しでも、こちらが口ごもつたり、つかえたりすると、「勝つた、勝つた」とはやし立てて、はては「萬才、萬才」と唱えて歸つて行く始末でした。このような手

段で、次々に寺や神社や教會を荒しまわり、「折伏運動」と稱して、一方的な勝利を信徒に報告するのです。何も知らぬ在家の人は、大勢の會員にとりかこまれて、へどもどしている住職を見ては、或は負けたのかなとも思うのが當り前です。このような場合にも、大勢の會員を命令一下、集合させたり、次々に討論させたり、はやすところではうまくはやせたり、その指揮のうまさ、そしてまた會員達の統制された行動は、實に訓練の行きとどいたものといわなければなりません。本年春小樽で日蓮宗と創價學會とが公開の席上討論會を開きましたが、その時の聴衆の中、創價學會側の大部分は命令によつて東京から急遽出張した青年部員だつたとのことです。青年達を、このように、手足のように動かして行くのには、その日常の訓練も大切ですが、それと同時に、會長の命令を佛勅として、絶対服従させて行く、指導力も大したものなのです。

餘談ですが、創價學會の人々が法論に來た場合には、絶対に「個人」としては會見しないことです。相手が十人ならこちらにも十人の人が出て、會う方が良いと思います。一人で會うと、たとえ、法論に勝つても、後で、それなら勝つたという證據があるか、などと言われますし、また、何といつても、相手が大勢ですと、よほど氣丈で自信のある人でも、ついつい億しがりになるものです。それも、禮儀正しく、對等に討論するのならしいのですが、理窟にもならぬことを、勝手にガヤガヤとはやし立てる相手なのです。から、まともに向つて行つたのでは、馬鹿を見るのがおち

です。やつて來たら、まづ人數を確めて、二三人位まででしたら、會うのもよいでしょう。多勢のようでしたら、日を改めて、地區の佛教會や組寺、またはそれぞれの組織を通じて、相應の態度をととのえてからの方がよいと思います。このことは、「小樽問答」の際、日蓮宗側の講師として講演された長谷川義一氏の、彌次がひどくて、満足に話も出來なかつたという言葉にもうかがわれます。「齒には齒を」というわけではないでしょうが、近來では、既成教團側でも、對抗的に青年層の組織化が行われております。つい先頃は日蓮青年會が結成され、早速、實踐運動に入つてゐるようであります。

### 三

そこで、このような軍隊組織が、どのような思想的地盤の上に、築き上げられているかということについて、考えることに致しましょう。

このことは、創價學會に限らず、最近の新興宗教の、大きな傾向として考えることが出来るのですが、その最大の原因は、被占領時代から、まがりなりにも自主獨立の時代へと、日本が大きく展開して來たということです。終戦時の混亂期に簇生した、多數の新興宗教は、その發生の土臺を「倫理」に置いていました。男女同權、人類平等、博愛公共などといった美しい言葉が、大抵の新興宗教の教條の中に掲げられていました。いわば、民主主義のお先棒をかついでいたのです。靈友會の「赤い羽根問題」はそれが少

しばかり、先走りすぎたために起つたことでしよう。新興教團が殆んどすべてが「會員組織」を採用したのも、教團自體の民主化の凝態だつたのです。こうやつて、看板や口先きでは、夫婦和合、家庭平和、子孫繁榮の倫理を説いていましたが、然し、その眞底には、抜きがたい封建主義・獨裁性を、秘かに溫存していたのです。このことは、新興宗教についていくらかでも研究の手を染めた宗教學者の、ひとしく主張するところだつたのです。私も、屢々、靈友會を例にとつて、會長獨裁主義についての實態をお話してみたこともありましたが、會長小谷キミ女史が、皇后陛下と同じ色の着物をきてみたり、おどる宗教で有名な天照皇大神宮教では、人民を「うち虫」と放言しています。教祖が神様だからやむを得ませんが、こんなところにも、特權意識というか、大衆蔑視というか、とに角、權威主義へのあこがれといったものが、既に漂つています。いつてみまますならば、新興宗教を通じての特徴が、その表面の看板は何であれ、一皮むけば、すべて、何か絶對的な權力に結びつこうとか、或は自分自らが、絶對權力を持つとすることにあるようです。このことは、近來、新興宗教の學問的研究に活躍されている小口東大助教授も、早くからいつておられます。

こうした、性格を持つ新興宗教としては、サンフランシスコ條約締結による日本獨立は、何といつてもチャンスでした。ころもの襟を、かき合せかき合せして、下に着ている鎧をかくしていた清盛入道のように、邪魔なところをす

つぱりと脱いで、大手をふつて、その本性をあらわすことが出来るようになったのですから、さぞかし、氣持ちのよいことでしよう。

日本人自身も、忘れていた祖國愛を、しみじみと抱きしめて、改めて眺めてみると、矢張り、日本人は神の子孫だ。東洋の君子國だ。天皇の赤子だ。といった氣持がしらすしらずに湧き上がつても来るようです。こういった復古的感情、反アメリカ態度、といつて「赤」は嫌やだといえはどうしても「日本オンリー」で行かねばならぬ。ここに、おそるべき新しい形のファシズムが擡頭して参ります。「天皇家の宗教」で急にジャーナリズムの話題となつた世界平和教の教主松元光三氏は次のように語つています。

「日本は有史以來、天皇によつて指導されてきた神國です。それが戦時中は軍部に左右されたり、戦後は共產黨に批判されたり、指導者でありながら眞正の指導ができなかつた。このくらいわれわれにとつて不幸なことはありませんまい。私はかつての軍部の横暴を叱正すると同時に、共產黨の天皇論をもあわれみをもつてみる者です。しかし、これらのすべてを包がんして、天皇を世界平和の指導者として、眞に天皇にふさわしい『座』に置くことが必要です。私はこの目的にそつて宗教活動を行つてゐるのです」(雜誌・黄金・九月號・二四頁)

私が、下手な文章でくだくだ書くより、この一文を掲げた方が、私のいわんとすることを、端的に示めてくれるようです。

日本の大衆の心に、ひそかに芽生え始めた、右への傾きをいち早く読みとつて、これに拍車をかけることによつて、自分の教團の發展を策するものとみることが出来ます。

それが創價學會になると、これに輪をかけたものです。前にも書いたように、會長自身が天皇のような權威を持ち創價學會自體が日本軍隊を以て任じ、日蓮正宗がかつての日本の神道の如く、その本山大石寺が伊勢の大神宮に匹敵すると考えられます。それには、それ丈の教義的な理由があるのです。

會長が天皇のような權威を持つのは、正宗の教理では、前號に書いたように、釋尊は脱佛で、もぬけのから。今日では日蓮本佛で、日蓮上人が本當の佛であるというのですが、この理論を押しすすめて行くと、やがて日蓮ももぬけのからになり、代々の大石寺の貫主に順々に佛がうつつて最後は現會長こそ佛であるということになる。(日蓮宗務院發行。創價學會批判・一二四頁) こんな理論が潜在意識となつて、創價學會々長を佛(天皇)といった錯覺を生むことになります。

また、正宗では、大石寺にある「板まんだら」の本尊こそ、世界中の人に日蓮上人が與えられたものだといふので丁度、三種の神器みたいなものと思われている。やがて日本中が日蓮正宗の信者になると、——戸田會長は今後二十四年以内にそうなると宣言してている——、大石寺は日本人のメッカとなり、日本の信仰の中心となる。——このことを「廣宣流布」といつてゐる。板まんだらがにせもので

あること、大石寺に日蓮上人のお骨があるということも眞實でないことなど、日蓮宗側の教義的批判が明かにされています。それでもなお、無理にこちつけて、正宗が唯一つの正しい宗教であり、他の宗教宗派の存在を認めず、やがては日本中、いや世界中の人間を、信者にしてしまおうとするのは、新しい形のファシズム、即ち宗教的假面をつけて、世界制覇を意圖するものでありますし、ファシズムの支柱をなす暴力主義が、創價學會の青年部の「折伏運動」となつてあらわれております。

更に、創價學會では、こういった目的を實現する一つの手段として、政界進出を劃策しています。例えば、昭和三十年四月の地方選舉には、東京都内で三十三名立候補して三十二名が當選、地方では十九名が當選しています。その中でも臺東區の原區議は最高點をとつています。次の地方選舉には四百名を當選させ、やがて近い將來、政治の指導權を會員によつて擁保し、國立戒壇の建立を國家の權力を以つて遂行しようと、大望しています。

このような、新興宗教の最近の傾向というものを、充分に認識しておくことは、實際の場合に當りましても、また弘く、宗教全體を考える場合に致しましても、是非必要なことと存じます。

(大正大學教授)

(なお今回の原稿を作製するに當りましては、日蓮宗青年會主催創價學會批判會の長谷川義一氏の講演が大變參考になりました。又同會に出席するために推舉狀を出して下さつた淨土宗務所當局にも謝意を呈します。次回は目下關心のまとなつてゐる墓所について考えてみたいと思ひます。)

## 後記

○私の家の近くに、小さな廣場がある。終戦後、公園も、運動場も失った近所の人々は、ずつとその焼跡の空地を「廣場」と呼んで

大人も子供も大事な憩いの場として愛し続けてきた。その殺風景な廣場に、いくらかでも美しい環境をと、有志が一隅に壇を設け花を植えた。ところが間もなく、折角

咲きはじめて美しい花々が、誰かによつて無慙にも手折られてしまったのである。何となく寂しい心持ちで先日行つてみたら、花壇のそばに立札があり、それは私の心をあため、花にも似た芳香を放つていた。

「花を大事にして下さい。花にも私たちと同じように、生きる権利があるのですから。」

そこに書かれた文字は、寺の若い住職の精魂がにじんで居り見る者の心を打つのである。

○諸般の事情で発行日も遅れて居

りますが、編輯人一同懸命の努力を拂い、逐次平常に復しつゝあります。會員の皆様には、御迷惑をおかけしてはいますが何卒御寛容の程を、尙、淨土發展の爲に一人でも多く御購讀下さるようおすゝめ致します。(宮林)

○けさは台風二十五號の關東上陸の公算大、と云う予報の爲か、町の空氣も重い感じ。折角の豊作も考えると氣持迄が重くなる、台風アウトカーブを祈る。

○とにかく今日は編輯會議の日、雨漏りのする宗務所の一室に集つたのは、宮林・梅津・小生の三人編輯會議は台風の余波?で流れ、その余談に、年毎ではあるが變える表紙の事、本年もあと三ヶ月、二三ヶ月先の事を考えるのが雑誌編輯の使命であつてみれば、鬼が笑つても考えない譯に行かない。結論は今年のはあまりにも抹香臭さすぎる——當り前?——もつと親しめるものと思うが、讀者の皆さんの御意見如何に。

○過去吉水教學部長喘息の小康を

得て晝頃御出になる、早速カレーうどんを御注文、氣管支系のものにカレーは、と考える、他に教育委員等にお忙しい氏、他事ながらお身體を大切に思う。(水谷)

○こんな話がある——昔、おろかな働ものがいた。川岸でひるねをしていると、河童が出て来て、置いてあつた農具をかくしてしまつた。男は目をさまし、河童のしわざと氣づき、呼び出してかえしてくれと頼んだが、河童は笑つてとりあわない。やむなく、男は川の水をかい出しはじめた。河童はまた／＼笑つたが、男はかまわずそれをつづけた。五日、十日。しみに河童の方が心配になつてしまつた。こうしていると、いつか川が干されてしまふかもしれないと思つたのだ。そこで、とう／＼河童はあやまつて農具をかえした。と——これは、中國の昔ばなしだが、我々が一つのものを、本當に自分たちのものにする爲には、この男のようなおろかさ、まだまだ必要らしい。考えさせられる面白い話だと思つた。(梅津)

## 會費(誌代)

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で安全確實な振替を利用して下さい、千圓まで二五圓の手數料で且、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か繼續會員かを明記して下さい。

## 「淨土」 十月號

昭和十年五月二十日  
第三種郵便物認可

昭和三十年九月廿五日印刷  
昭和三十年十月一日發行

(定價三十圓)

編輯人 竹中 信常

發行人 佐藤 密雄

印刷人 春山 治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京都品川區上大崎一ノ七八三

發行所 法然上人續仰會

振替 東京八二一八七番

佛教曆に「浄土宗要綱」「浄土宗年中行事解説（お詣りの日）」「佛教聖訓集」を添加したもので、浄土宗の施本としては、これにこしたものではありません。

## 昭和 卅一年 浄土宗三寶曆

寺院より檀信徒へ贈る年末年始の贈答品として最適！

○四六判、四十頁。定價一部四十圓、送料八圓。

浄土宗寺院に限り、一部 特價 十五圓。

二百部以上寺名無料  
サービスします。  
申込は十月末日迄。

東京都港区芝公園十九號地ノ一番  
浄土宗教化團中央本部  
振替東京六一九三九番

### 特價奉仕

- 一、寺院用佛具類一式
- 一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇

區役所前

### 正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

## 幼稚園 保育園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にの  
ットで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松  
答・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。



### 篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718  
電(75)1024(池上驛東3分)

|           |          |
|-----------|----------|
| 銀ブランコ2人乗  | ¥ 13,000 |
| 銀ブランコ3人乗  | ¥ 15,000 |
| 銀ブランコ4人乗  | ¥ 22,000 |
| 銀ブランコ6人乗  | ¥ 26,000 |
| 椅子ブランコ4人掛 | ¥ 13,500 |
| 太鼓橋       | ¥ 10,000 |
| ジャングルジム中型 | ¥ 28,000 |
| 單式滑臺中型    | ¥ 23,000 |
| 復式滑臺中型    | ¥ 36,500 |
| 動物付き遊動木   | ¥ 30,000 |

此他各種、一報カタログ送

配達費(都内横濱500圓以内  
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通  
送り、(荷造費當社・送料着拂)  
組立説明書送付